

2020年9月13日第二主日礼拝

イエスの名によって歩み出す

使徒行伝 第3章1－8節

1 さて、ペテロとヨハネとが、午後三時の祈のときに宮に上ろうとしていると、2 生れながら足のきかない男が、かかえられてきた。この男は、宮もうでに来る人々に施しをこうため、毎日、「美しい門」と呼ばれる宮の門のところに、置かれていた者である。3 彼は、ペテロとヨハネとが、宮には行って行こうとしているのを見て、施しをこうた。4 ペテロとヨハネとは彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。5 彼は何かもらえるのだろうかを期待して、ふたりに注目していると、6 ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。7 こう言って彼の右手を取って起してやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、8 踊りあがって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮には行って行った。

あらすじをふり返って

1節 主イエスの昇天後、弟子たちはいつも決められた時間に神殿で祈っていた。午後3時は、「夕べの祈り」である。神の驚くべきみわざは、いつも決められた時間に祈る、祈りの中で起こる。

2節 エルサレムは城の街である。大きな石を積み重ねた城壁に囲まれている。その城壁にはいくつか城門があつて、「美しい門」はその城門のひとつである。その名のとおり美しい装飾のある門だつたと思われる。その門の入口に、来る日も来る日も運ばれ置かれている人があつた。彼は生まれながら足が不自由で、立つこともできなかつた。彼はそこで物乞いをしていた。

3節 その男の前を、弟子のペテロとヨハネが門をくぐり通りかかつたのである。男はすかさず施しを乞うた。

4節 すると、二人はその男をじっと見つめた。私なら、できるだけ目を合わさないようにして、足早にそこを通過したであろう。彼らはじっと見つめた。にらみつけたのでもなく、好奇心でのぞき見たのでもない。親しみをもって、「この人のために何か良きことをしたい」という思いから見たのである。さらに驚くのは、ペテロは「私たちを見なさい」と言った。

5節 当然のこと、男は、何かもらえるだろうという確信と期待をもって、二人に目を注いだ。

6節 ところが、男の意に反して、ペテロは「私には金銀はない」と言った。男は「なんだ、金はないのか」とつぶやき、落胆しただろう。ペテロは続けざまに、「私にあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」と言った。

7-8節 ペテロはそう言って、男の右の手を取って立たせたようとした。立てるはずがないし、彼も立つつもりはない。ところが、全く思いがけないことが起こった。ペテロが手を取り、男の手を引き上げると、急に足とくるぶしが強くなり、立ち上がったのである。足をがくがくしながら、身体をくゆらせながら立ったのではない。男は躍り上がって立ち、歩き出したのである。そして、彼は神をほめたたえながら神殿を出て行った。

1. 他人を見、他人に見られる

ペテロとヨハネとは彼をじっと見て、
「わたしたちを見なさい」と言った。 4節

初対面の人と、目と目を合わせて話すことには緊張と恐れがあつて、多少勇気を要する。牧師をしていて、面談し話を聴く場合に、正面から向かい合わないで、横並びで相手側にやや椅子と身体を向ける。顔と顔を合わせないが、時折、相手の表情を見たりすることができる。これはもちろん、相手が緊張せずに話せるように配慮したものであるが、主がこの交わりの中におられることを意識し、その人自身が主に向かって語り、主の語られる御声を聴けるようにするためである。

しかし、ペテロとヨハネは男と目と目を合わせ、対面することを求めた。それは相手を威圧するためでなく、それは、彼らには主からいただいたいくしみと恵みを分かちたいという思いと、この人が主によって癒され、立ち上がった

て歩み出してほしいという強い願望があったからである。

2. 金銀はない

ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。・・・」 6節

「金銀」、いわゆるお金がなくては生活して行けない。「金銀」がなくてもいいということではない。しかし、なくても乏しくても生きて行ける。それは、「イエスの名」があり、イエスご自身がおられるからである。必要な時には、「伝家の宝刀」とも言うべき「イエスの名」があり、この名によって祈るならば、ケリテ川のほとりに身を隠したエリヤがカラスによって養われたように（サムエル記上 17:6）、私たちには「乏しいことはない」（詩篇 23:1）。

「金銀」とはお金、財のことだけではない。広い意味では、金や銀のように光り輝くような、才能や経歴などもさす。そうしたものがいっさいなくとも、私たちにただ「イエスの名」さえあれば、主が託してくださる大切な仕事を、主は責任をもって果たせるようにしてくださる。

木場深川教会の牧師となる前、私たち夫婦は聖書学院の男子寮、女子寮のそれぞれの舎監をしていた。主なる仕事は、修養生の信仰と生活の指導であった。修養生の身近にあって、彼らの信仰が神によって試されるのをしばしば垣間見た。将来、牧師、伝道者、宣教師の働きに就くにあたって、修養生時代に例外なく、誰もが試みられるものであった。それは「金銀」は持たずとも、ただ「イエスの名」をさえ持っているならば、この仕事は必ず果たすことができるということを信じられるか、どうかということであった。特に、輝くような才能や経歴を持っている人がそれを手放し明け渡すことができるかが問われていたのである。

3. イエスの名によって

しかし、わたしにあるものをあげよう。

ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。 6節

「私には何もない」という人にも、「あるものがある」。今日、主イエス・キリストを信じるならば、誰にでも等しく「イエスの名」が与えられるのである。私たちはどのような境遇にあっても、イエスの名によって歩もうとするならば、この男の人のように躍り上がって立ち、歩み出すことができる。

わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。
父が子によって栄光をお受けになるためである。
何事でもわたしの名によって願うならば、
わたしはそれをかなえてあげよう。 ヨハネ 14 : 13、14

わたしを強くして下さる方によって、何事でもすることができる。
ピリピ 4 : 16

私たちは何ら変わらなくとも、「イエスの名」がある。この名によって祈り、
この名によって歩み出すならば、道は必ず開かれてゆく。

4. 神に向かって生きる新しい人生へ

男は門の前に坐り、土埃にまみれになってただ置かれていた。私たちも、この男のように、ただ置かれているだけの人生を歩んでいないだろうか。惰性で生きている。新しい発見や感動もない。ただ延々と同じことを繰り返している。神と向かい合い、神のみことばを聴いてその言葉に従うなら、ただ置かれているだけの人生から、神に向かって生きる新しい人生が始まる。そこには、成長と実りがあり、生き甲斐と感謝と喜びがある。

金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。
ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。 6 節